

大阪大学グローバルCOE プログラム「コンフリクトの人文学」 講演会のご案内

日 時： 1月9日（金）5限（16時20分～17時50分）

場 所： 大阪大学 豊中キャンパス 文法経講義棟4階 文41 教室

講 師： 河村 英和 先生

タイトル： 「19世紀イタリアのホテル建築と結核の関係」

概要： 英国人貴族を中心とするグランドツアーの最盛期である18世紀半ば以降、その主要旅程ルート上にある各都市に「大英帝国ホテル」という名のホテルがしばしば発生した。またこの時期より、イタリアは英国人にとって結核の転地療養に適した土地として評価され、結核の治癒を期待する上流階級の英国人が、イタリアのある特定の町を中心に旅行していた。産業革命による都市の人口集中・大気汚染問題に伴い、イギリスはヨーロッパで最も結核の罹病率が深刻となりそれに比例するかのようになり、19世紀初頭以降イタリア国内で、英国風の屋号のホテル（「イギリス」、「ヴィクトリア」、「英国女王」、「アルビオン（英国の雅称）」、「ロンドン」など）が増加してゆく。一方、結核のサナトリウム療養でスイスが名声を馳せるのは、主に1880年代以降であり、スイスでの英国風屋号のホテルの発生・増加はイタリアより約70年遅い。19世紀半ば以降、結核処女地であったカプリ島が、転地療養の地として注目され、英国人医師の開業した結核診療所がのちにカプリを代表する高級ホテルとなり、その客層のほとんどが英国人であったのは偶然ではない。19世紀末、上流階級の外国人結核患者が長期滞在するためのヴィラの建設が盛んになるが、カプリではその建築様式としてネオ・イスラム様式が流行した。同様に英国人の間で結核療養地として名高い南仏コートダジュールの町にも、同時期にネオ・イスラム様式のヴィラが建設されている。この建築様式は1920年代のカプリで、地元本来の郷土建築とは相容れない「外人により輸入されたニセモノ建築様式」として反発を受け、次々とそのアラブ風装飾部分が建物から剥ぎ取られてしまった。

講師略歴：

1972年ニューヨーク生まれ。東京工業大学工学部建築学科卒業、ローマ第3大学建築史マスターコース修了、ナポリ・フェデリコ2世大学建築学部建築史科博士号修得。現在、同大学建築史科助手、経済学部観光学科「近代美術史」契約教授。ナポリ在住。

主 著：

「カプリ島 地中海観光の文化史」 2008年12月17日発売

http://www.hakusuisha.co.jp/detail/index.php?pro_id=02641

「Alberghi storici dell'isola di Capri（カプリ島における歴史的ホテル群）」2005年6月刊行

<http://www.laconchigliacapri.com/customer/search.php?substring=kawamura>